第Ⅰ編　共通編

１．筑後市上下水道事業経営戦略策定の目的

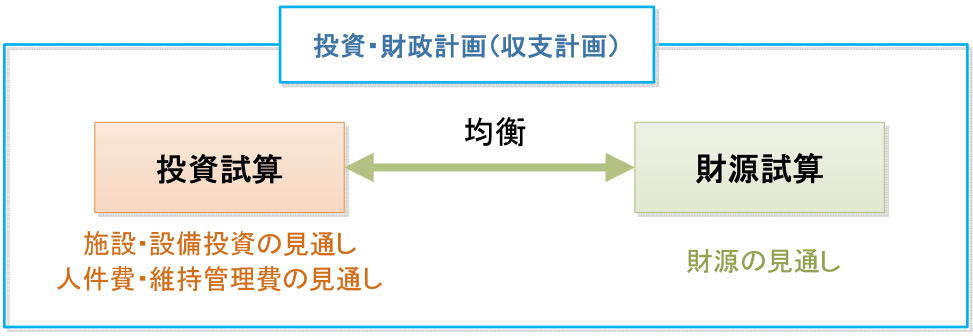
本市水道事業は、昭和35年に発足した簡易水道に源を発し、昭和38年に広域簡易水道として創設した後、昭和51年から第１期拡張事業、第２期拡張事業と２期にわたり事業の拡張を行い今日に至っています。水源として計8か所の井戸による自己水源と福岡県南広域水道企業団の浄水を受水することにより、久恵、西牟田、北牟田の３施設を拠点とし、各戸へ水道水の配水を行っています。

本市下水道事業は、平成10年度に２市４町（筑後市、八女市、立花町、黒木町、瀬高町、広川町）で構成する矢部川流域下水道の関連公共下水道として事業に着手し、平成18年10月に一部供用を開始しました。その後の社会経済状況の変化に対応するために、県が策定する矢部川流域下水道計画と調整を図りながら、適時公共下水道計画の見直しを行い、下水道事業の整備を進めています。

上下水道事業においては、施設の老朽化に伴う更新時期の到来や人口減少に伴う料金収入の減少等により、経営をとりまく環境は今後厳しくなることが懸念されており、住民の日常生活に欠くことのできない上下水道は、将来にわたっても安定的なサービスを提供し続けることが可能となるように、中長期的な経営の基本計画となる「経営戦略」の策定が総務省より要請されています。

これに基づき本計画は、以下に示す3つの項目の内容を包括するものとして、「投資試算」及び「財源試算」の将来予測方法、経営健全化や財源確保の具体的方策を整理し、経営戦略としてとりまとめるものです。

- 筑後市上下水道事業が将来にわたり安定的な給水や汚水処理を継続していくための中長期的な経営の基本計画の策定。
- 「投資試算」（施設・設備投資や維持管理費の見通し）等の支出と「財源試算」（財源の見通し）を均衡させた「投資、財政計画」の策定。
- 組織の効率化・人材の確保と育成、民間委託の活用、広域化、上下水道料金の改定等による経営健全化の取り組み方針の明示。



【経営戦略のイメージ】

２．市の概要

筑後市は、筑後平野の中央に位置する田園都市です。博多からJR鹿児島本線を利用すると約45分、九州新幹線を利用すると約24分、車で九州自動車道（八女インターチェンジ）を利用すると約1時間の距離にあります。

昭和29年4月に、羽犬塚町、水田村、古川村、岡山村の一部が合併して筑後市となり、その後、三潴郡西牟田町と八女郡下広川村の一部を編入合併し、現在に至っています。

市全域は、東西7.5㎞、南北8.2㎞、面積41.78平方㎞のほぼ平坦な地形となっています。

市街地は、JR羽犬塚駅と国道209号、国道442号沿線を中心に形成され、この地は、古くから西海道が通じる交通の要衝となっていました。特に、薩摩（坊津(ぼうのつ)）街道は、それぞれの地域の文化をもたらし、古来の文化をベースに磨かれた独自の文化を生み出しました。

南部には、八女市の山間部を水源とする矢部川が流れ、ハヤ、アユ、山太郎ガニ（モクズガニ）などが取れるとともに、河畔には観光のメインスポットである船小屋温泉郷があり、当湯については日本有数の炭酸含有量を誇っています。

また、温暖な気候と肥沃な土地、恵まれた水を利用して、古くから米・麦・イグサ・ナシ・ブドウ・八女茶をはじめとする農業が盛んに行われるとともに、伝統工芸である久留米絣は市を代表する特産品でとなっており、広くその名が知られています。

なお、交通の利便性を生かした企業誘致にも力を入れ、多くの製造業企業が立地しており、周辺のほとんどの自治体で人口が減少する中、筑後市の人口や世帯数は微増傾向が続いており、平成23年3月には「県南地域の玄関口」となる九州新幹線筑後船小屋駅が開業し、全国からの訪問者を迎え入れています。

筑後市の位置

市中心部（筑後市役所）